

島の暮れ方の話

小川未明

青空文庫

南方なんぽうの暖あたたかな島しまでありました。そこには冬ふゆといつても、名なばかりで、いつも花はなが咲さき乱みだれていました。

ある早そうしゅん春はるの、黄たそがれ昏くれのことでありました。ひとり旅たびびと人は、

道みちを急いそいでいました。このあたりは、はじめとみえて、右みぎを見たり、左ひだりを見たりして、自分じぶんのゆく村むらを探さがしていたのであります。

この旅たびびと人は、ここにくるまでには、長ながい道みちを歩あるきました。また、船ふねにも乗のらなければなりません。遠とおい国くにから、この島しまに住すんでいる、親しんせき戚せきのものをたずねてきたのであります。

旅たびびと人は、道みちばたに水すいせん仙せんの花はなが夢ゆめのように咲さいているのを見みました。また、山やまに真まつ赤かなつばきの花はなが咲さいているのを見みまし

た。そして、そのあたりは野原のほらや、丘おかであつて、人家じんかというものを見みませんでした。暖あたたかな風かぜは、海うみの方ほうから吹ふいてきました。その風かぜには、花はなの香かおりが含ふくんでいました。そして、日ひはだんだんと西にしの山やまの端はに沈しずみかけていたのであります。

「もう日ひが暮くれかかるが、どう道みちをいったら、自分じぶんのゆこうとする村むらに着つくだろう。」と、旅たびびと人は立たち止どまつて思し案あんしました。

どうか、このあたりに、聞きくような家うちが、ないかと、また、しばらく、右みぎを見みたり、左ひだりを見みたりして歩あるいてゆきました。ただ、波なみの岩いわに打うち寄よせて碎くだける音おとが、静しずかな夕ゆう空ぞらの下したに、かすかに聞きこえてくるばかりであります。

このとき、ふと旅たびびと人は、あちらに一軒けんのわら屋やを見みつけまし

た。その屋根はとび色がかかっていました。彼はその家の方に近づいてゆきますと、みすぼらしい家であつて、垣根などが壊れて、手を入れたようすとてありません。彼は、だれが、その家に住んでいるのだらうと思ひました。

だんだん近づくと、旅人は、二度びつくりいたしました。それはそれは美しい、いままでに見たことのないような、若い女がその家の門にしよんぼりと立っていたのでした。

女は、長い髪を肩から後ろに垂れていました。齒は細かく清らかで、目は、すきとおるように澄んでいて、唇は花のよううるわしく、その額の色は白かつたのです。

旅人は、どうして、こんな島に、こうした美しい女が住んで

いるかと思ひました。またこんな島だからこそ、こうした美しい女が住んでゐるのだとも考えました。

旅人は、女の前までいって、

「私は、お宮のある村へゆきたいと思つて、どの道をつたらいいでしょうか。」といつて、たずねました。

女は、にこやかに、さびしい笑顔を顔にうかべました。

「あなたは、旅のお人ですね。」といいました。

「そうです。」と、旅人は答へました。

女は、すこしばかり、ためらつてみえましたが、

「わたしは、どうせあちらの方までゆきますから、そこまで、ごいっしょにまいりましょう。」といいました。

旅人は、「どうぞそうお願いいたします。」と頼みました。そして、二人は、道を歩きかけたときに、旅人は、女を振り向いて、

「あの家は、あなたのお住まいではないのですか？」とききました。すると、女はやさしい声で、

「いいえ、なんであれがわたしの家なのですか。今日はわたしの二人の子供たちが、遊びに出て、まだ帰ってきませんから、迎えに出たのです。すると、あの家の壁板に、去年いなくなつた、わたしの妹の着物に似たのがかかつていましたので、ついぼんやりと思案に暮れていたのでございます。」と、女は答えました。旅人は、不思議なことを聞くものだど驚いて、美しい女の横

こが
顔をしみじみと見守りました。ちようど、そのとき、あちらから、

「お母さん！」

「お母さん！」

と、二入のかわいらしい子供が駆けてきました。女は、喜んで、二人の子供を自分の胸に抱きました。

「わたしたちは、ここで別れたいです。あなたは、この道をまつすぐにおゆきなされると、じきにお宮のある村に出ますから。」と、女は旅人に道を教えて、花の咲く、細道を二人の女の子といっしょに、さびしい、波の音の聞こえる山のすその方へと指してゆきました。

旅人は、それと反対に山について、だんだん奥に深く入つてゆきました。山々にはみかんが、まだなつているところもありました。そして、まったく、日が暮れた時分、思つた村にすることができたのであります。

その夜、燈火の下で旅人は、親戚の人々に、その日不思議な美しい女を見たこと、そして、その女はあちらのさびしい山のすその方へと草道を分けていったことを、話したのであります。

そのとき、親戚の人は、驚いた顔つきをして、「あんな方には、家がないはずだが。」といいました。

旅人は、また、「妹の着物に、よく似た着物が壁板にかかつ

ていた——その妹は、去年行方がわからなくなつた——。」と

いつた女の言葉を、いぶかしく思わずにはいられませんでした。

よくじつ 翌日、旅人は、親戚の人といつしよに、昨日、女がその

家の門に立つていたところまでいつてみることにしました。

南の島の気候は、暖かです。空はうっとりしていました。そして、

みつばちは、花に集まっています。旅人は、昨日の黄昏方

見たわら屋までやってきますと、その家は、まったくの破れ家で、

だれも住んでいませんでした。そして、壁板のところをながめま

すと、美しいちよの翼が、大きなくもの巣にかかっていたので

ありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

※表題は底本では、「島《しま》の暮《く》れ方《がた》の話
《はなし》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2014年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

島の暮れ方の話

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>